海の誘惑

岸田國士

人影のない夕暮の砂浜を、たゞ一人、歩いてゐることが好きでした。

それは私の感傷癖と別に関係はないやうです。水と空とを包む神秘な光に心を躍らせる外、一向追憶めいた追憶にふけるわけでもなかつたのですから。まして、月が波の上に出るのを待つて、ロマンスの一節を口吟むほど甘美なリヽシズムをも持ち合せてゐない私なのですから。

が、然し、それは、私の空想癖とは密接な交渉があるらしく思はれます。なぜなら、あの岩角に当つて砕ける濤（なみ）の姿から、常に一つの連想を呼び起し、渺茫た

る水平線の彼方に、やゝもすれば奇怪な幻影を浮び出させるのがおきまりだつたからです。

憂愁を歌つた世界最初の詩人、シヤトオブリヤンの墓から汀づきに、「エメラルドの浜」と呼ばれるブルタアニユの北海岸、そこは河原撫子の乱れ咲くラ・ギモレエの岬なのです。

ホテルとは名ばかりの宿に、私一人が客でした。「何しにこんな処へ来なすつた」主人は私の顔を見るたんびに、かう訊ねかけたものです。

それでも、麦の穂が黄ばむ頃になると、松林を背に

した宏壮な別荘――「プリムロオズ」と名のついたその別荘の前庭で、ナポレオンの血を享けてゐるといふ男装の美女が、葉巻をくゆらせながら、多くの紳士淑女に交つて、ゴルフなどをしてゐるのが見えました。

或る月曜日の午後、一台の辻馬車が、私の泊つてゐるホテルの前に駐まりました。車を降りたのは、一目でパリからの客とわかりはしましたが、どつちかと云へば地味なつくりをした、二十二三の女でした。

女は一人でした。

さあ、話が面白くなりさうです。と云つて、あなた方の予想どほり、月並な小説的事件が起るわけではありません。

彼女は三度三度食堂へ出て来ました。私は蒸肉の一と切れを自分の皿に盛りながら、いくらかの好奇心も手伝つて、彼女の住居などを尋ねました。

三日たち、四日たち、風が一度吹き、雨が二度降りました。

五日目の日が暮れかゝらうとする頃です。私は、例によつて、一人で、雨上りの砂浜を歩いてゐました。

波が少し立つてゐました。何時になく疲れが早く出て、私は、とある岩角に腰を下ろしました。

私の眼は、もう幻想を追つて、砂と水と空との間をさ迷つてゐました。そこには、見知らぬ男女の、さまざまな姿が浮び、それが代る代る珍らしい踊りを踊つてゐました。

ふと、私は、後ろから聞えて来る微かな跫音に耳を聳てたのです。

それは彼女でした。彼女はそつと私に忍び寄らうとしてゐるのです。

あゝ、かういふと、もうそんな眼附をなさる！

私は、わざと驚いた振りをして見せました。彼女は、大声に笑ひながら駈け出しました。

さうさう、彼女は、この土地へ着く早々、しきりに退屈を訴へました。そして、土曜日の晩を待ち遠しがつてゐました。土曜の晩には、パリから、一晩泊りで彼女の夫が来る筈になつてゐるのです。

余談ですが、パリなどでは、夏になると、細君や子供を避暑地にやつて置いて、夫は、土曜日の晩から日曜へかけてそこへ出掛けて行く風習があります。土曜の午後、パリの各停車場には、さういふ夫たちを運ぶ

汽車が準備されてある。これを俗に「亭主列車（トランドマリ）」と呼んでゐます。

彼女は、その「亭主列車（トランドマリ）」を待つてゐる細君の一人なのです。尤も、それを待ち暮さないやうな女なら、こんな淋しい土地へ一人で来るわけがないぢやありませんか。

そこで彼女は、大声で笑ひながら駈け出しました。と、思ふと、五六間離れた砂山の蔭から、水着一つになつて飛び出しました。私の方は見ずに、そのまゝ、海へ――その姿を私は微笑みながら見送りました。

彼女のからだは、もう腰から下、水に漬かつてゐました。両手を水平に左右へ、それを肩から押し出すやうに振つて、深く深くと進んで行くのです。一度波を浴びたその乳色の肩先が、薄暮の光を受けて鱗のやうに輝いてゐました。

間もなく、彼女の首だけが、波の上に浮んで見えました。

此処に来て、それまでは一度も海にはいらうと思はなかつた私は、この時、何となく、着物が脱ぎたくなつた。何を躊躇してゐるのだ！　起ち上つて、私はまた別の岩角に腰を下ろしてしまひました。

彼女は、めつたに人と口をきゝませんでした。どうかすると、人に話をさせて、自分は何かほかのことを考へてゐる、さういふ風なことさへよくありました。

「本をお読みになれば、何かお貸しゝませうか」

「小説？　あたし小説は嫌ひですの」

おゝ、ミユウズよ、彼女の冒瀆を赦せ。彼女は、その代り彼女の夫を何ものよりも愛してゐるに違ひない。

彼女は自分の部室に閉ぢ籠つてゐることはありませんでした。

首から上の彼女は、こつちを向いてゐるらしかつた。抜き手が時々乱れた。頭が度々水の中にかくれました。それが、今度は、激しく現はれたり消えたりしました。両手だけが同時に水の上に出ました。波が細かにゆれました。

「助けて…………」といふ声が聞えるのです。私は笑つてゐました。

また「助けて……」

私は笑はうとしました。が、今度は、無意識に上着を脱ぎ棄てました。

見ると、彼女の顔は、もうそこに見えるのです。空

を仰いで、狂ほしく叫んでゐる。ほどけた髪の毛が、もれ上る波の頂に逆立つてゐます。

私は夢中で水の中に飛び込んだ。此の瞬間、自分の勇壮な風姿を想像して、一寸口をゆがめました。

水が膝まで来るところで、私は彼女の方に手を伸ばしました。彼女は、真蒼な頬に感動の色を泛べながら私の手に取り縋りました。

やがて、彼女のぐつたりしたからだが砂の上に運ばれました。

「お芝居でせう」かう云つて、私は苦笑しました。

その翌日、夕食の時刻に、私は彼女の夫に紹介されました。彼は幸福な男のあらゆる表情を漲らせながら、私の手を握りました。

彼女は、その日の朝、私が散歩に出ようとするのを呼び止めて、かう云ふのでした。

「昨日のこと、うちには黙つてゝ頂戴。叱られるから……。うちがあなたにお礼を云はなくつても悪く思はないで下さいね。その代り、あたしは一生この御恩は忘れませんわ」

私は黙つて、彼女の眼を見ました。

誘はれるまゝに、私は二人のお伴をして海岸に出ました。彼女は、昨日の事件を想ひ出させる場所に来ると、夫の蔭から私の方に笑ひかけました。

「此の方は随分御親切なのよ。昨日あたしが晩御飯に遅れたら、道を迷つたんぢやないかと思つて、わざわざ迎ひに来て下すつたの」

「さうか」夫はそれほど興味が無さゝうに答へました。

夫は、なぜだか、彼女が私について話すのを厭ふやうに見えました。実際、彼女は、私のことを話し過ぎるのでした。彼女は、それに気がついてか、「処で店の

方はどう」などゝ問ひかけるのでした。そして、私には、時々例の微笑を送ることを忘れないのです。私は、丁度一人で歩いてゞもゐるやうに、黙つて、自分だけの幻想を楽しみながら、静かに歩を運んでゐました。

　彼女のぎごちない笑ひ声のみが、時々私の頭を掻き乱す外、海浜の暮色は、常の如く、私の心を超実在の世界へ導くのでした。

　あの水の底に、もつと美しい、そしてもつと自由な女を見てゐるのです。その女は、私に救ひを求める代りに、私をさし招いてゐるやうに思はれるのでした。

何時の間にか、私は二人の姿を見失つてゐました。
海が、白い歯をむき出して嗤つてゐました。

翌朝、彼女は私の耳もとに口をよせて
「あたしたち、今晩パリへ帰りますの。あたしをこんな淋しい処へ一人で置いて置くわけに行かないつて云ふんですのよ。それやさうね」

夫婦は、その日の夕方、馬車に乗りました。真夏の夕日が、都に帰るといふ若い二人の背に、皮肉な明るさを投げかけてゐました。

底本：「岸田國士全集20」岩波書店
１９９０（平成２）年３月８日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
１９２６（大正15）年６月20日発行
初出：「女性　第八巻第一号」
１９２５（大正14）年７月１日発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志、小林繁雄
２００５年９月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。